

程度の變化を認めるが、中毒症移行例にはすべて明かな變化がみられ、血管型よりみると攣縮型が最も多く、また中毒症移行例の67%が高血圧家系あるいはその近親に中毒症をみた家系に属していた。③皮膚毛細血管抵抗値は中毒症では低下し、血管透過性の亢進がみとめられた。④ Insulin による發汗、血糖、好酸球試験では妊娠すると間脳一下垂體—副腎皮質機能が漸次亢進し、中毒症では更に異常亢進を示すものが多いことが判つた。

Ⅲ. 妊娠中毒症の治療

降壓劑としては Apresoline, Serpasil の併用が最も適當であり、浮腫には Diamox が著効を奏した。

6. 妊娠動物における Reilly 現象の成立について

(東京醫大) 秦清三郎, *高橋禎昌, 藤田眞助, 野平知雄, 齋藤成一, 高見嘉都司, 豊田輝人, 前島昭二, 桶谷正一, 柵山勝利, 林 達朗, 池田純輔, 陳 育俊, 石居秀朗, 長谷川行信, 喜納 進

Reilly 現象すなわち自律神経の過剰反応にもとづく症候群による病因論の新概念は、近來 Laborit らがその理論を應用して臨牀的成功を収めたことから注目されている。

われわれは Reilly の實驗方法に考按を加えて妊娠動物に適用することにより、從來妊娠中毒症なるカテゴリーに一括されて來た妊娠、分娩に伴う種々なる母體障礙に類似する症候を發現させることが出来るかどうかを検討した。

I. 實驗方法

1) 實驗動物：妊娠白鼠によつて豫備實驗を行い、妊犬、妊兎によつて確認する。

2) 侵襲方法：ゴナドトロピン、性ホルモン、副腎皮質ホルモン、自律神経毒、アルコール、ペプトン水、鹽化アンモンなどの化學物質、感應電流刺戟、大腸毒などの細菌

3) 侵襲部位：下腹神経、勃起神経、骨盤神経叢、内臓神経節、子宮靜脈囊法（頸靜脈囊法の應用）。

4) 化學物質の濃度：Reilly 現象の本旨に基き、その藥物の通常生體効果量以下の各種濃度を使用することを原則とした。

5) 發現阻止手段：クロールプロマジン投與、下垂體剔除、副腎剔除。

6) 判定方法：胎盤、子宮、肝、腎、肺、胃、副腎、

腦などの臓器の形態學的病變、血壓、尿の變化。

Ⅱ. 成績

各種化合物の種々なる濃度と侵襲部位との組合せは多岐にわたるので、例数は乏しい憾は免れないが、興味あると思われる結果の概要を摘記する。

1) 侵襲によつて病變をおこす場合は、出血、壊死などによつて代表される血管障礙の同一形式非特異性病變が浮び上つて觀察される。

2) 病變がおこる場合、クロールプロマジンの阻止効果は適確でないが、副腎剔除は殆んど阻止し、下垂體剔除はこれにつぐ。

3) 今のところ、侵襲部位と侵襲方法には特異的な組合せは見つからず、また骨盤神経叢、内臓神経節及び子宮靜脈囊法の一部にのみ病變が見られる。

4) エストロゲン、20%アルコール、5%ペプトン水の内臓神経浸潤注射の場合は、肝、腎、胎盤に上記病變が認められる。

5) 大腸菌浮遊液の骨盤神経叢浸潤注射は胎盤病變を確實におこす。

6) DOCA及びアドレナリンは子宮靜脈囊法によつてのみ胎盤及び腎に病變をおこす。

7) 病變のある場合、血壓ははじめ上昇し、まもなく低下するものが多い。尿は不定。

8) これ以外の侵襲方法は豫備實驗の段階で不変または不定で、さらに精査を要するものである。

以上の成績からつぎの如く判断する。妊娠動物の腹部の自律神経部位に各種の侵襲原因を加えるとき、一部の侵襲は Reilly 現象を成立させることが確實であり、その際の病變は血管變化による退行性病像という基本的な點において、ヒトの子癩の病理學的所見に甚だ近似する。

7. 妊娠家兎における Reilly 氏現象の研究

(慶大) 野嶽幸雄, *櫻井祐二, 田村昭蔵, 土屋恭一

妊娠中毒症の本態的研究に關しては、本邦においては、胎盤物質の研究が多く、また歐米においては、體液動體の研究が盛である。

われわれは Reilly 氏現象の概念を導入し、本現象の妊娠中毒症における意義につき検討を進めている。まず妊娠家兎の子宮、胎盤における Reilly 現象の發現に重點をおき、つぎの實驗を行つた。

實驗方法。妊娠家兎の兩側または偏側の内臓神経節及びその周圍に Stressor の微量 (P. S. 物質 1~3 mg,